

# 伝説と詩作

——リルケ『マリアの生涯』をめぐる

田 口 義 弘

1

マリアの生涯というとき人びとが想い浮かべるのは、ひとつの連続した流れのようなものではなく、飛び石のように並んだ断片の連鎖に似ているだろう。しかもそれは多彩ではないし、多くの出来事と結びついてもない。むしろそれは、いわば要点だけから、数少ない根本的な瞬間と数少ない決定的な場面だけからなるひとつの生涯である。

- (1) マリアの誕生
- (2) マリアの奉獻
- (3) マリアへの告知

伝説と詩作

- (4) マリアの訪問
- (5) ヨセフの猜疑
- (6) 牧人たちへの告知
- (7) キリストの降誕
- (8) エジプトへ逃れたおりのいこい
- (9) カナの婚礼
- (10) 受難の前に
- (11) ピエタ
- (12) 復活のイエスとマリアの安らぎ
- (13) マリアの死 (三篇)

これらはリルケがその『マリアの生涯』に収めた各詩篇につけた標題だが、いわゆるマリア伝中の重要な出来事はほぼすべてこのなかに含まれている。むしろこれらには、マリアの誕生前史としてのヨアキム夫妻の物語をつけ加えたり、△受胎告知▽の前に△ヨセフとの婚約▽、△キリストの降誕▽の後に幼な児イエスの△奉獻▽や△割礼▽、△エジプトに逃れたおりのいこい▽の後に△神殿における十二歳のイエス▽を補ったりすることができる。だが、どのような補足によってもマリア伝の場面は、よほど周辺のなものや間接的なものを加えないかぎり、二〇場面をそう大きくは越えないであろう。しかもこの断片連鎖的な生涯像ほど、長い時間をかけておもむろに形成されたものはない。そもそもマリアという女性にたいする伝記的関心自体すら、彼女の死後ほぼ一世紀

を経てようやく生じるにいたったと推定されるのである。

リルケはその詩集『マリアの生涯』を「マリアの誕生」によって始めている。

おお 天使たちにはなんと努力がいったことだろう、  
泣き叫ぶような歌声をふいにあげずにいるために。

彼らは知っていたのだ、やがて現われる独り子のために  
その母がこの夜うまれることを。

はばたきしかも黙しつゝ 天使たちは指さした、

ヨアキムの屋敷がそれだけひとつ立っている方角を。

ああ 彼らは感じていたのだ、自らのうちに 空間のうちに純粋な凝縮を。  
だが誰もヨアキムのもとへ降りてはゆかなかつた。

夫婦がすでにせわしい準備にわれを忘れていたからだ。

さかしらにやってきた隣りの女もなすべを知らなかつた。

そして老いた夫はそっと出てゆき 黒い牝牛の啼き声を抑えた。  
そんなことはまだかつてなかつたからだ。

飾りけのない表現にうったえつつ、貧しい地上の一事件を秘蹟的で超自然的な緊張のなかに置いてこの詩は、むしろ作者のまったくの虚構ではない。新約外典のいくらか注意深い読者ならばここに、『ヤコブ原福音書』の反映を認めるはずであり、またこの外典に書かれているマリアの誕生の次第と、その前世紀あるいは前々世紀に書かれたとおぼしい『ルカによる福音書』におけるイエスの誕生に関する記事との一種の類似性をも感じ取るかもしれない。しかしなぜ、イエスの誕生についての記事が書かれてからこのようにも長い時間を経てやっとマリアの誕生についての記事が書かれたのか？ あるいはマリア伝とはそもそもどのようなようにして形成されるにいったのか？ この点を整理することはとりもなおさずルケの『マリアの生涯』の原型をたずねることもなるだろう。

## 2

マリアについて最初の言及を行なっている書は『新約聖書』であり、けれどもこれはまたその全体をとおしで、ごくわずかなことをしか彼女について語っていない書である。ここで彼女はまず、二つの福音書のイエスの誕生に関する記事のなかで、受胎を告知される処女（『ルカ』）、そして救世主を生んだ若い母（『マタイ』および『ルカ』）として登場するが、この告知と出産に密接な関係のある出来事として福音書が物語っているのは、婚約者ヨセフの疑い（『マタイ』）、ヨセフとの肉交なき結婚（『マタイ』）、受胎の告知を知らせるための親族の女エリサベツのところへの訪問と、そのさいにマリアのとなえた神への讚美（『ルカ』）、羊飼いたちにたいする救世

主誕生についての天使の告知と羊飼いたちの来訪（『ルカ』）、東方の三博士の来訪と幼児イエスへの彼らの礼拝（『マタイ』）である。またこれに続く出来事として『マタイ』による福音書』はヘロデ王の幼児虐殺と、それを避けるためにヨセフとマリアが幼児イエスを連れてエジプトへ逃れ、ヘロデの死にいたるまでそこにどまっていたということを伝え、『ルカ』による福音書』は幼児イエスの割礼および神殿への奉獻という宗教的行事と、この奉獻のさいシメオンという老人がマリアに、イエスの使命と、そのために彼女が受けるだろう苦しみについておこなった予言のことを書きしるしている。イエスの誕生とその直前・直後の時期におけるマリアに関係した以上のようにそれぞれ簡潔な言及が、福音書中の彼女に関する記事のなかでは、実のところもっとも詳しいものである。

これに比べてイエスの少年時代におけるマリアに関しては、『ルカ』による福音書』が、十二歳のイエスを伴ってエルサレムへ出かけたマリアとヨセフが帰宅するおりにイエスが姿を消してしまい、三日後にエルサレムの神殿で律法教師たちと話を交している彼の姿を見つけたときの彼の言動にたいする、マリアの当惑と不安について書いているだけである。

またイエス在世中のその後の歳月におけるマリアについては、ただ『ヨハネ』による福音書』がカナという地でおこなわれたある婚礼の席にイエスやその弟子たちとともに居合わせたマリアのふるまいを伝え、さらにイエスの受難にさいし、彼の十字架の下に他の者たちとたたずんでいたマリアにごく短く触れているだけである。

イエス昇天後のマリアについては、ただ『使徒行伝』が、エルサレムのある場所でマリアが息子の弟子らといっしょに祈りをささげていた、と書いているにすぎない。

付表 《新約聖書におけるマリア》

マリアに関する記事	マタイ	ルカ	ヨハネ	使徒行伝
イエスの系図	I・16	・	・	・
マリアへの受胎告知	・	I・26 / 38	・	・
婚約者ヨセフの疑い・ヨセフへの告知	I・18 / 26	・	・	・
ヨセフとの肉交なき結婚	I・24	・	・	・
エリサベツのところへへの訪問・三ヶ月そこに滞在	・	I・39 / 56	・	・
イエスの誕生	・	II・6 / 7	・	・
イエスの誕生と三博士の来訪	II・1 / 12	・	・	・
イエスの誕生についての羊飼いの告知・羊飼いの来訪	・	II・8 / 20	・	・
イエスの割礼と命名	・	II・21	・	・
エジプトへの避難	II・13 / 19	・	・	・

イエスの奉獻とシメオンの予言	.	Ⅱ・22 / 35	.	.
ナザレへの帰還	Ⅱ・21 / 23	Ⅱ・39	.	.
神殿における十二歳のイエス・ マリアの当惑	.	Ⅱ・41 / 51	.	.
カナの婚礼	.	Ⅱ・1 / 12	.	.
十字架上のイエスとの対面	.	Ⅸ・25 / 27	.	.
イエス昇天後のマリア	.	.	Ⅰ・14	.

こうして通観すると明らかのように、新約聖書のなかにマリアにたいする伝記的関心を認めることはできない。福音書記者のうちでも特にマルコとなると、およそマリア自身を顧慮していないようにさえみえる。『マルコによる福音書』にはただ一個所、それもイエスの郷里の人びとが、宣教を開始したイエスに不信を示して「この人は大工ではないか。マリアの息子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではないか」と語るくだり（第六章第三節）に、マリアの名が出てくるにすぎない（同様の記事は『マタイによる福音書』第一三章第五、五、五六節、『ヨハネによる福音書』第六章第四二節にもみられる）。

それに新約聖書においてマリアは、イエスの宣教が主題となつているところでは、もう周辺の人物であるといふ以上に、舞台裏の人物である。よく見れば新約聖書のマリアは、イエスの誕生の次第が語られる部分でのみ、

イエスに次ぐ重要な位置を占めているわけである。またこの場合にも、処女降誕の記事の主眼は、マリアの人格性の称揚であるよりはるかに一層、イエスの誕生の固有な意義の強調だったと考えるべきだろう。しかしいずれにしても、新約聖書によって与えられたマリアの資格、処女であるままに聖霊によって身ごもり救世主の母になった女性というそれはまったく独自のものであり、特にルカが感銘深く描き出した処女マリアの形姿は、イエスの位置に応じてマリアの位置を高めようとする後代の傾向と不可分に結びついている。そして処女降誕という事柄のマリアの側における意味を特別に重視して、それをマリアという存在の内部にたずねようとするとき、そこには、マリアとその生涯にたいする独立的な関心が生じてくるわけだ。マリアへの関心の高まりに応じて、彼女の生涯についての推定や想像は、福音書では語られていない領域のなかへ彼女の姿を追い求めつつ、独特な展開をとげるにいたるだろう。

## 3

マリアへの伝記的関心から書かれた最初の書は、新約外典のうちの『ヤコブ原福音書』（四福音書のほば一〇〇年後、二世紀末頃に成立）である。これはマリアの誕生の次第に始まり、彼女がイエスを出産するまでの出来事と、それに後続する二、三の出来事を物語っていて、部分的なマリア伝ともいうべきものになっている。この書ではまず、ヨアキムとアンナという夫婦の、子供がないための悲しみが描かれる。ヨアキムはあるとき神殿での奉納のさい、子供がないという理由から他の者たちより先に捧げ物を奉納する権利を否認され、悲しみのあまりそこから妻のところへは帰らず、荒野で四十日と四十夜のあいだ断食して、子供を得たいという彼の願いの成



就を神に祈りつづける。妻のアンナは夫がいなくなったこと、自分の身に子供が授からぬことの二重の嘆きをなげているが、ある祭の日が近づいたときそのアンナに、彼女が子供を身ごもるだろうという天使の告知がおこなわれる。またヨアキムも同じような告知を受けて荒野から帰ってアンナと神殿の門（金門ともいわれる）で再会し、神に感謝の奉納をおこなう。そしてこのあと、『ヤコブ原福音書』は、マリアの誕生と幼児マリアへの祭司の祝福について語り、ついでヨアキム夫妻が三歳に達したマリアを神殿に奉獻したときの様子を語る。この書によれば、マリアはそのまま神殿で養育され、十二歳になったとき、初潮を迎えるに先立って、そこでの生活を終えることになった。

新約聖書ではまったく語られていない、以上のような出来事に続けて『ヤコブ原福音書』はマリアとヨセフとの婚姻、マリアへの受胎告知、ヨセフの疑い、マリアのエリサベツ訪問、イエスの誕生、エジプトへの避難など、『新約聖書』（主に『ルカ』、一部『マタイ』）の記事と大筋で符合する出来事を物語っているが、その記事は多くの個所で新約聖書よりも詳細かつ具象的な描写にうったえている。また、処女降誕とマリアの存在の清浄性を、時には露骨な生理的記述をまで用いて主題的に一貫して強調している点が、この『ヤコブ原福音書』の特質であって、この書は高まりつつあったマリア崇敬の反映であると同時に、それ以後のマリア崇敬に大きな影響を与えたものようである。

このほか新約外典のなかでは、特に『偽マタイ福音書』（成立年代にたいする推定はまちまちで、五世紀に書かれたとするものから、八、九世紀とするものまである）<sup>3)</sup>がマリアにたいする伝記的関心を示している。この書には『ヤコブ原福音書』の大意がとり入れられているが、この書独自のくわしい記述は、エジプトに避難した折

の「△聖家族」の生活を語った部分にみられる。「マタイによる福音書」や「ヤコブ原福音書」では、エジプトへの避難がおこなわれたという事実のみが述べられ、エジプトへの道中、またはエジプトでの一行の経験についてはなにも書かれていなかったのに比べて、この偽書では、旅の途中でさまざまな猛獣（龍、獅子、豹、狼など）に出会うたびごとに、それらの獣から一行を守って彼らの恐れを取りのぞくイエスの神秘的な力（第一八～一九章）、はげしい暑さにマリアが疲れはてて渴きをうったえたとき、イエスが高い棕櫚しゅろの樹に命じてその樹冠を低く垂れさせ、マリアたちがその実で空腹や渴きをいやしながらこの棕櫚の樹蔭で休息する話（第二〇章）、一行がエジプトのある神殿に足を踏み入れたとき多数の偶像が倒壊してしまう話（第二二章）などが書かれているのである。

『偽マタイ福音書』に書かれた「△エジプトでの休息」を原型とした美術作品は、『マタイによる福音書』（第二章第一三～一六節）を典拠としたいわゆる「△エジプトへの避難」に比べはるかに少ないとはいえ、デュラ1、コレッジョ、ハンス・バルドゥンググリーン、ヤン・シヨレールなどに例があり、またリルケの『マリアの生涯』に話を戻すなら、その「△エジプトへ逃れたおりの安らぎ」は『偽マタイ福音書』との対応性が強く認められる作品である。

嬰兒ごろしのさなかから

息をきらしてようやく逃れてきた者たちよ——

おお 彼らはそのさすらいのあいだに人知れず

なんと偉大になっていたことか。

おずおずと振りかえる彼らの眼には

ほとんどまだ恐るべき危難が消えていなかった、

しかし灰色の騾馬らばの背にあって彼らは

もうすべての町を危難におとしいれていた。

大地の広がりのうちにあつては微小な——無にも似た——

彼らが近づいただけでもさまざまな強固な神殿で

あらゆる偶像が裏切られたようにとび散って

そして狂ってしまった。

自分たちの歩みのためにかくも

絶望的にものみながいきどおることなどありえようかと

彼らは自分自身にすら怖れをおぼえた、

ただ聖子みこだけがいいようもなく安らいでいた。

ともあれ彼らはしばらくの憩いのために

腰をおろした。するとそのとき——

見よ、静かに頭上を覆っていた樹が

仕える者のように彼らのうえに垂れかかった。

その樹は身をかがめたのだ。死せるフアラオたちの額を

その樹冠でいたわっていた樹が

身を傾けたのだ。その樹は新しい王冠が花咲くのを

感じていた。そして彼らは夢みるように坐していた。

この詩では、自分たちの行為にとまってゆえなく（実は幼児イエスの身から）生ずる奇蹟的な力のために、聖家族が感じる不安のほうが作品の主要情調をなし、それが最後にいたって、イエスの存在から発する超自然的な、しかし慰撫の働きをおだやかに及ぼすような力によって静められ、さらに幼児イエスの安らぎのなかに吸収される。これにたいして『偽マタイ福音書』の情緒的構造はもっと単純であり、ここではほとんど幼児イエスの神秘的な力だけが強調されるのである。しかしルルケのこの詩のさまざま細目が、いったいどの程度に詩人の創意によるものかというような問いにもなう好奇心を『偽マタイ福音書』ほどに満足させる書もないであろう。たとえばこの外典に、マリアとイエスが「エジプトのカピツール」と呼ばれる神殿にはいったとき、そこにあった三六五個の偶像のごとくが倒れ落ちて砕けたというような記事（第二章）を読むとき、これはこの詩への注記のひとつともみえるのである。

いずれにしても新約外典はマリア伝の形成に大きく寄与し、芸術の領域におけるマリアの生涯の形象化にあたって、そのさまざまな場面の原型となっているわけで、リルケの『マリアの生涯』のなかでは「マリアの誕生」「マリアの奉獻」「エジプトへ逃れたおりのいこい」が新約外典のなかにその原型をもつものであり、また「マリアへの告知」「マリアの訪問」「ヨセフの猜疑」「キリストの降誕」の四篇は福音書と外典の両方に、これらがそれぞれうち出している場面に関連する記事が見られる作品である。そして今度は造形美術のなかから例をとるなら、アルブレヒト・デューラーの版画『マリアの生涯』のうちでは「ヨアキムの奉牲」「ヨアキムと天使」「金門の再会」「マリアの誕生」「マリアの奉獻」「マリアの婚約」が、アレーナ聖堂のジョットのフレスコ画のうちでは「しりぞけられるヨアキムの捧げもの」「牧人らのところに来たヨアキム」「聖アンナへのマリア誕生の告知」「ヨアキムの奉牲」「ヨアキムの夢」「エルサレムの金門でのヨアキムとアンナの再会」「マリアの誕生」「マリアとの婚約を望む男たち」「選びを待つ求婚者たち」「マリアとヨセフの婚約」「マリアの結婚式」が外典に由来するものである。

典礼の領域のなかでは、熱情的な崇敬の表現のうちに伝記的要素をもふくむものとしてビザンツの礼拝でうたわれるマリア讃歌（アカティストス・ヒュムヌス）（リルケの『マリアの生涯』に題詞を提供しているこの讃歌についてはあとでまた言及する）が、福音書の記事をふまえつつ受胎告知からエジプト滞在までの出来事に触れているが、面白いことに最後の出来事だけは『偽マタイ福音書』に由来する伝説に依拠していて、エジプトの偶像倒壊を暗示する表現にうったえている。

『ヤコブ原福音書』や『偽マタイ福音書』などは、新約聖書よりもはるかに強い関心をマリアにたいして示しながら、しかしマリアの生涯を完全な伝記的完結性をそなえたものとしてうち出すまでにはいたらなかった。また新約聖書と外典というこの両者をおして浮かびあがってくるマリア関係の事項は、『使徒行伝』第一章第一四節に、イエスの昇天後マリアが他の弟子たちとともに祈っていた、とひとことだけ書かれているのを別とすれば、イエスの在世中のそれに限られている。その例外も、バルトロマイなどの使徒と、マリアおよび昇天後のイエスとの問答をおもな内容とする断片『バルトロマイ福音書』（三世紀に成立）その他にみられるが、これらはいずれも真面目な顧慮にあたいしないし、少なくともマリア伝の形成に寄与している文書ではない。また、イエスの受難のさいのマリアについても、すでに述べたように、新約聖書にはたった一個所（『ヨハネによる福音書』第十九章第二五―二七節）、十字架上のイエスとマリアとの対面に言及した記事が認められるだけである。現在ほぼ固定した構造をそなえて人びとの念頭にあるようなマリア伝は、中世諸期をおしての補足によってようやく完結をみるのである。そこではその補足の試みは主として、イエスの受難とその直前・直後におけるマリアの形姿や、マリアの死ないし昇天へと向けられた。中世の中期および後期の観想、特に聖ベルナルや聖フランチスコのそれからは、受難の前におけるイエスとマリアの別離や、イエスの亡骸なまがらに面してのマリアの歎きの姿が、マリアの生涯の場面に意味深く加えられることになり、ハマリア哀歌の抒情詩的あるいは演劇的表現、そして

美術における△ピエタ△の造形に道を開いた。またすでに四世紀の教父アンブロシウスの立論や、ヤコブス・デ・ヴォラギーネの『レゲンダ・アウレア（黄金伝説）』（十三世紀）、ボナヴェントゥーラの名を擬された人物（偽ボナヴェントゥーラと称せられる）の『キリストの生涯への観想』（一三あるいは十四世紀）の第七二章などが、復活したイエスの聖母、マリアへの最初の顕現という（新約聖書にはこのような記事はなく、周知のように復活後のイエスは最初にマグダラのマリアに現われたと——『マルコによる福音書』第一章と『ヨハネによる福音書』第二〇章に——記されている）出来事を事実として受けいれる傾向の先駆となったようである。

したがって、十四世紀にプラハで描かれたものなどを初めとして、十五世紀のヴァン・デル・ヴェイデ、十六世紀のティツィアーノのこの題材による作品その他、さまざまな先例が美術の領域にあるように、リルケの『マリアの生涯』中でもっとも良質な作品とすべき次の「復活のイエスとマリアの安らぎ」も、その主題は決して詩人が創案したものではない。

彼らがそのとき感じたことは

ありとある秘密にまさって甘やかで

しかもなおこの地上のことではなかったか——

彼はまだほのかに墓の蒼みをとどめつつ

かるやかに彼女のもとへと歩みよった、

からだ  
身体からだのすみずみまでもよみがえって。

おお　まず彼女のもとへ。彼らはそこで

なんといいがたく快癒のうちにあつたことだろう。

そう　彼らは快癒していた、そうだった。彼らには

強く触れあうことは必要でなかった。

つかのま彼は

母マリアの肩に、

永遠のものになろうとしているその手をおいた。

そして彼らは始めた、

春の樹々のように静かに、

しかも無限に、

彼らのこよなき交わりの

この季節を。

一方、マリアの死に関するもっとも古い文書記録は、エバンヘリスタの『マリア論入門』によれば、四世紀末に聖エピファニウスが書いたと推定されているが、四世紀末ないし五世紀末に成立したマリアの死についての伝説『マリアの遷化』(Transitus Mariae)はきわめてよく普及したもので、五世紀以来まず東方教会の内部で、そしてのちには西方においても、マリアの死に関する主題をあつかった文書がさまざまな形で現われるようにな



ったといふ<sup>(6)</sup>。ジェームスン夫人の『マドンナの伝説』によればこの『マリアの遷化』は使徒ヨハネの作だとも考  
えられていた<sup>(7)</sup>。『レゲンダ・アウレア』がその「マリアの昇天について」の章の冒頭に使徒ヨハネが書いたとさ  
れている外典的な書と呼んでいるのもこの偽名メリト<sup>(8)</sup>の書のことであろう。これは実は外典ではなく伝説で、中  
世研究家マッサーはこの書の内容を次のように要約している――

「キリストが十字架から指示したように（ヨハネによる福音書）第一章第二六―二七章参照）、マリアは（キ  
リストの昇天後）キリストの愛弟子ヨハネの家で生活していたが、その二年目にひとりの天使が彼女に死と昇天  
を告知する。世界中いたるところにおもむいて教えを宣べ伝えていた弟子たちは彼女の昇天に立ち会わされるこ  
とになり、ついそのときまで遠い町々に滞在していた使徒たちはふいに自分たちがマリアの家の門口に集められ  
ていることに気づく。それから三日目にキリストがあまたの天使とともに現われ、天使たちに挨拶し、彼の母と  
言葉を交す。マリアは臥床<sup>ふしと</sup>に横たわり、そして亡くなる。彼女の魂はその神々しい息子とあらゆる天使とに付き  
そわれて天に昇る。弟子たちはマリアの亡骸<sup>なまがら</sup>を埋葬すべくその準備に取りかかるが、不思議にもその亡骸にはい  
ささかの腐敗の気配すら現われない。墓への道の途中、ユダヤ人の祭司長が棺の台をくつがえそうとするが、彼  
の手は朽ちて棺にくっついたままになってしまふ。この祭司長は、イエス・キリストとその永遠に処女なる母を  
信ぜよ、という聖ペテロの勧めに同意することによって癒やされる。この出来事を伝え聞いたすべての民衆は、  
その祭司長とともに回心する。弟子たちが三日のあいだ眠らずにマリアの墓を守ったあと、キリストが新たに天  
使の群とともに降りてきて、彼の母の魂をその肉体に返す。すべての弟子の面前で、天使たちの合唱に包まれつ  
つ、キリストとマリアは天上の楽園のなかへ浮上してゆく<sup>(9)</sup>。」

マリアの死および昇天という面からする中世のマリア伝補完がいかなる内容のもだったかをわれわれがもつとも容易に知ることのできる資料は『レゲンダ・アウレア』の「マリアの昇天」の章だが、いったいにマリアの生涯の伝記的完結性をそなえた全体像（すなわちひとつの生涯の発端―誕生と終局―死に関する表象をそなえた生涯像）は、新約聖書ならびに新約外典の一部と、これらを慎重に踏まえつつその補完としてうち出された中世の諸表象・諸伝説によって徐々に形成されたのであり、具体的には、マリアの誕生ないしは誕生前史に始まって昇天（カトリックの厳密な概念においては被昇天）にいたるまでの特定のモメントからなる様式をもつものとして定着することになったのだ。美術や文学の領域でのマリアの生涯の造形もこの展開を追って、また部分的にはこの展開と平行しておこなわれ、民衆のなかへのマリア伝の普及に大きな役割をはたしたようである。

## 5

画家たちがマリアの生涯に属する出来事のなかから、それぞれ自己の志向にかなった一連の場面を選択して描いたマリア伝連作画――これらのうちには先にも引きあいに出したアレーナ教会堂のジョットの壁画（イエスの生涯とともに描かれていて、マリアの生涯に属するものは「しりぞけられるヨアキムの捧げもの」から「カナの婚礼」までの二二場面）、デューラーの木版画（扉の「半月の聖母」や「聖母の栄光」を除けば「ヨアキムの奉牲」から「マリアの戴冠」までの一八場面）や、さらに、場面のきわめて多い例としてのオルヴィエート大聖堂のウゴリーノ・ディラリオの壁画（「しりぞけられるヨアキムの奉牲」から「マリアの戴冠」までの二八

場面)など数多くをあげることができる。むしろこれらのように多くの場面をあつかっていない、一〇場面以下の連作画も少くないし、それに、マリアの生涯のうちの一場面だけを描いたものとなると、周知のことながら、まったく数かぎりない。

しかし、文学の領域でマリアの生涯をこうした伝記的連作画にも似た形で描いた作品は、少なくともわが国の人びとにとってどれほど、いや、こういうよりもむしろ何がいったい知られているだろうか？ F・L・ファイラスによれば、マリアの生涯を描いた詩作品は、教会のマリア崇敬が一般的になった十一世紀以後に多く現われるようになり、「紀元一〇〇〇年頃から数百年のあいだ、マリアの生涯を詩や散文に表わすことが流行した。」<sup>(9)</sup>このファイラスその他が例としてあげているのは十一世紀のドイツの女流詩人フラウ・アヴァの『マリアの生涯』、フランスの司祭エルマンの『聖母の生涯』(十二世紀)、ドイツの司祭ヴェルンヘルムの『マリアの生涯』(十二世紀)、同じくドイツで書かれた作者不詳の『聖処女マリアと救い主の生涯についての韻律詩』などである。この最後の二書については、アーヒム・マッサーの『ドイツ中世における聖書の・伝説的叙事文学』からややくわしくその内容を知ることができる。マッサーによれば、前者は『偽マタイ福音書』にもとづいて当時のドイツ語で書かれた大きな分量の叙事詩(未完)で、ヨアキムとアンナの物語に始まり、エジプトへ避難した△聖家族▽が故国へ帰るよう天使から指示されるまでの作品展開のなかに教化的意図を強くうち出したものであり、後者はラテン語で書かれた八千詩行をこえる長大な作品で、マリアの生涯についてそれまでに伝えられたさまざまな物語を集成したような形のもとに、ヨアキムとアンナの伝説からマリアの被昇天までの出来事を(イエスの生涯の展開をそのなかにふくみつつ)語ったものである。<sup>(10)</sup>もうひとつもっと近い時代のなかから、今度は私が直接に参照し

えた例をあげよう。これは修道女アンナ・カタリーナ・エメリク（一七七四—一八三四）がその神秘的幻視体験をとおして語ったマリアの生涯の、クレメンス・ブレンターノによる記録である。この膨大な『マリアの生涯』においては、高度に敬神的・マリア崇敬的な気分をたたえた一人称体の散文による叙述のなかに、マリアの生涯について伝承されてきたいっさいと、イエスの生涯についてのそれとが書きこまれている。ポール・クロードルをもきわめて深く感動させたこの書は、ドイツをはじめとしてヨーロッパには少なからぬ読者をもっているようだ。しかし、中世に書かれたさまざまなマリアの生涯と同様、このエメリク・ブレンターノの書も、わが国の人びとにとってはほとんどまったく未知である。マリアに関するその文学的表現にわれわれがなんらかの形で触れたことのある文学史上の名は、まずダンテ、ペトラルカ、チョーサーなどであり、ついでグリフィウス、ルター、クロプシュトック、ノヴァーリス、シェリー、ドロステヒヒュルスホフ、ワーズワース、アイヒュンドルフ、リルケ、クローデル、ル・フォールその他であろう。けれども、彼らのマリアに関する表現の多くは、マリア讃歌に類するような崇敬的造形であって、マリアの生涯を、ジェームスンの用語によれば歴史的ヒストリカルにその全体像においてうち出した水準の高い詩的成果としては、リルケの『マリアの生涯』しか知られていないのは不思議である。しかもこれは、その断続的連作形式に対応するような作品が、文学史の領域によりも、はるかにいっそう美術史の領域に見いだされる仕事であって、実はこの詩集は、マリアを主題とした現代の詩集として、形式上きわめて稀有な位置を占めているわけである。以下、小論はリルケのこの仕事を離れることなく進められるであろう。

リルケの『マリアの生涯』の成立事情は、作者自身がA・キッペンベルク、ジッツォー伯爵夫人、ヘルマン・ポングスなどに宛てて書いた手紙をとおして知ることができる。<sup>(13)</sup> それらによればこの詩集の直接的な成立動機となつたものは、画家ハインリヒ・フォーゲラーの勧めである。マリアの生涯に関連のあるリルケの詩に自分が挿画を描いた書の刊行を、フォーゲラーはずっと以前から計画していたが、この計画は実現されぬままになつて、リルケはその話がもう帳消しになつてしまつたものと思ひこんでいた。ところが一九二二年一月の初旬にリルケは、彼が一九〇〇年にフォーゲラーに献呈した一連の作品などをふくむ、マリアについての一〇篇の詩を自分の挿画と合わせて刊行したいというフォーゲラーの意図にあらためて直面する。リルケはこのとき、相手の申し出を歓迎するような様子はみせない。リルケには、フォーゲラーの念頭にあるような、過去の不本意な作品を集めた詩集を刊行する気にはなれなかつたのである。一方しかし、フォーゲラーの申し出はやはり、マリアの生涯をまともな形で示すような連作の新たな構想へとリルケを刺激したにちがいない。その月の一五日から二三日までの一週間に彼は『マリアの生涯』を仕上げたのであつて、ちなみに、同月の二一日には『第一のドゥイーノの悲歌』が完成し、月末から翌月初旬までのあいだには『第二の悲歌』が書かれている。翌年五月のその刊行にあつてはしかし、フォーゲラーの挿画はリルケの意向によって用いられず、その代りに詩人はこの詩集をフォーゲラーに献げ、この画家の勧めによってそれが誕生したことにはたいする感謝を表明したのである。

リルケ自身が告白しているところによれば、『マリアの生涯』の制作にあたって彼の詩想を触発したもののひとつは『アトス山の画式書』<sup>(14)</sup>であった。詩集全体の題詞となっている古典ギリシア語の言葉 *καὶνὴν εὐδοσίαν ἐξου...* (*zaiēn endochen echon...*) もリルケは、この画式書のゲーデハルト・シェーフアーによるドイツ語版(二八八五)をとおして知ったようである。ビザンツ典礼のさいにうたわれるマリア讃歌『アカティストス・ヒュムノス』の第六詩節はマリアの受胎に気づいたときのヨセフの猜疑を物語っていて、日本語に訳すと「疑い深い考えの嵐を内にもつて、賢明なヨセフは(心が)乱れた」という詩句で始まっている(ギリシア語原文では、リルケが題詞として選んだ傍点部「嵐を内にもつて」が文頭にくる)が、エルント・ツインの論文「リルケと古代」は、詩人がこの題詞を『アトス山の画式書』の独訳書のなかに見つけたと考え、しかもリルケがこの言葉を原意とは異なる意味に解して採用したと推定している。E・ツインによれば『アトス山の画式書』には、『マリアの生涯』の題詞となった言葉が独訳で引用され、また注の部分に原語が示されていたが、独訳者が *Sturm* という語をドイツ文字で手書きしたものが、出版された書物では *Raum* と誤植されていて、*einen Sturm in sich habend* となるべきところが *einen Raum in sich habend* になっていた——リルケはしかし『アカティストス・ヒュムノス』第六節冒頭の詩句の難解なギリシア語をそれ自体としては理解できぬまま、誤植された独訳の意味に解して採用したらしいのである。<sup>(15)</sup>

私自身は『アトス山の画式書』(独訳)を参看することができず、またマリアンネ・ジューヴェルスがマリアの祝日と結びついている(マリアの生涯中の)出来事としてこの画式書が挙げているものに注意を喚起しているのを除けば、『マリアの生涯』への言及をふくむいかなる文献も両者の対応関係を論じていないので、もはやこの

問題については間接的な手だてをもってさえ語ることができない。しかし、『マリアの生涯』が画家のために書かれたキリスト教図像学的な画式書から多くを得ているとすれば、それはマリア伝連作画と相通するところの深いこの詩集の性格に大きく関係しているであろう。事実、中世から始まって、わけても十四、五世紀に好んで制作されたマリア伝連作画にある程度以上の関心をもつ人びとならば、それを想起することなくこの詩集をひもたくわけにはいかないのである。

またジッツォー夫人宛ての手紙（一九二二年一月六日付）のなかでリルケは「マリアの奉獻」を引き合いにして、そこにはイタリアの絵画への追憶が容易に認められるだろうと書き、この詩との関連において、ヴェネツィアのアカデミア美術館のティツィアーノや、サンタ・マドンナ・デル・オルトのティントレットの作品を例としてあげている。しかし、ティツィアーノやティントレットの（マリアの奉獻）にちょっと眼を向ければおのずから明らかなように、リルケの詩はそれらから受けた印象を言語化したような性質の作品ではないし、いったいに『マリアの生涯』に属する個々の詩をそれぞれなんらかの特定の美術作品の印象を再現したものであるかのよう  
に考えるのは無理であろう。むしろ「ピエタ」のように、それがイタリアのアクィレーヤの聖堂で見た後期ゴシックのピエタ像をふまえた作品であることを詩人自身が明記している例もみられはするけれど、これにしてもその心理的色調にはリルケ独自のものがこの詩集中の他の多くの作品よりも強く感じられるのである。

いまやわたしの悲嘆はみちて、名状しがたく

わたしをみます。わたしは石の内部のように堅く

こわばっている。

堅くこわばりながら、わたしにはただ一つのことをわかっている、

あなたは偉大になった――

……そして偉大になったあなたが

いまはあまりにも大きな苦痛であって

わたしにはけっして

包みえないということが。

いまあなたはわたしの膝のうえに横たわっている、

わたしはもうあなたを

産むことができない。

詩集『マリアの生涯』とマリアに関する造形美術の諸作品との関係は、リルケ自身の告白が直ちに感じさせるよりずっと多様であるように思われる。つまり、ひとつの詩の誕生にはたぶんいくつもの美術作品が意識的・無意識的に影響していたのであり、それらが他の諸作用とともに働いてリルケのうちに、同時に情景であり言葉でもあるようなひとつの絵を作り出していたのであって、これがやがて『マリアの生涯』のなかの各詩篇と化すにいたるのだ。その結果われわれは、美術のうえでのマリア伝連作画の伝統に連なるようなものとしてこの詩集をもつことになる。リルケはいわば彼自身のマリア伝連作画を詩作という異なった領域なかで描き出すことによっ



て、古い時代の美術の巨匠たちの列に、間接的に連なったのである。

7

むろん、この詩集の制作にさいし、聖者伝のなかの MARIA に関する記述がリルケの念頭にあったらうこともつけ加えなくてはならない。彼が聖者伝につねづね深く親しんでいたことは、マリエッタ・フォン・ノルデック・ツァーラーベナウ宛ての手紙（一九一〇年四月一四日付）における彼自身の言葉からうかがわれるばかりではない。一般的に彼の仕事が折にふれてさまざまな聖者の伝説を題材としたり、比喩的表現に利用していることは、彼がかなりよく聖者伝説に通じていたことを示しているが、ほかならぬ『MARIAS の生涯』の成立直前にマノン・ツァー・ゾルムス<sup>18</sup>ラウバツハ伯爵夫人に宛てた手紙（一九二二年一月二日付）にも、最近はりバデネイラ（リバダネイラ）の聖者伝を読んでいる、と書かれている。またおそらくこの手紙にもとづいてインゲボルク・シュナックは、その『リルケ年代誌』のなかでとくにこの聖者伝『フロース・サンクトールム』と『MARIAS の生涯』の関係に言及し、リルケがりバデネイラによってこの詩集の場面を決めているというような指摘をおこなっている。<sup>18</sup>リルケが読んだホルニヒによるりバデネイラの独訳<sup>19</sup>を實際に参照してみると、そこでは教会暦の祝日順に、MARIAS の生涯のうちから (1) MARIA への告知（三月二五日）(2) MARIA の訪問（七月一日）(3) MARIA の昇天（八月一五日）(4) MARIA の誕生（九月八日）(5) MARIA の奉獻（十一月二日）(6) MARIA の無原罪の懐胎（十二月八日）(7) MARIA の出産待機（十二月一八日）(8) キリストの降誕（十二月二五日）の各祝日と結びついている事件

についてのかなり詳細な記事がみられる。この聖者伝のいくつかの部分がリルケの発想に寄与していることはどうやら確実なようだ。たとえばバデネイラが「マリアの昇天」のなかで、マリアの臨終に間に合わずにあとからおかれてやってきた使徒トマスのために墓がふたたび開けられたときの様子を語っているく<sup>20</sup>だりは、そこでは他の使徒たち対トマスの関係であるものを天使対トマスの関係へと転換して、出来事を客観的な表現からトマスに対する天使の詩的な語りかけのなかへ移し変えるなら、リルケの「マリアの死について」(三篇)の最後に位置する次の作品と根本的に一致するものになるだろう。墓所から消えていた亡骸と、その代りにそれだけひとつ残されていた亜麻布、そして墓をみだしていた天上的な香り、これらのモチーフはたんに偶然にリルケの詩のなかに再現するのではないように思われる。

だが使徒のトマスがおくれて

やってきたとき、とつくにそれを予期していた

天使がトマスの前に歩みよって

埋葬の場で彼に命じた。

石を取りのけよ。おまえの心に

感動を与えた女がどこにいるかを知りたいならば、

見よ——彼女はラワンデルの匂い枕のように

しばらくそこに収めいられたのだ、

大地もこののちはうるわしい布さながら

彼女の香りをそのひだに宿すため。

すべての死せるもの、すべての疫病は（おまえも感じとっているように）  
そのよき香りによって凌駕されているのだ。

見よ この亜麻布を。どこでさらされてこの布は

眩しく輝きそして縮むことがないのだろうか？

いや マリアの浄らかな屍から生じた光が

陽光にもまさる力でこの布を明るくしたのだ。

驚かぬのかおまえは、なんとおだやかに彼女はこの布を脱したとか。

いまなお彼女の在るかのようには、いささかもそれは乱れていない。

けれども天は感動にふるえているのだ。

男よ、ひざまずけ、そして去りゆくわれを見送って歌うがいい。

あるいは「受難の前に」の最後の六行をなす次のような詩句に目を向けてみよう。

もしもあなたにあなたを引き裂く虎だけが必要であるならば

どうしてわたしは女の家ではぐくまれたのだろうか、

あなたのやわらかで純な衣を織るために？

あなたの肌を傷めるささやかな縫目の痕ひとつない

衣を織ること——それがわたしの全生涯だった。

けれどもいまあなたはふいに自然の相を裏返してしまうのだ。

イエスが十字架につけられたとき「上のほうから全部ひとつに織った、縫い目のない衣」を着けていたという話は『ヨハネによる福音書』第十九章第二三節をとおしてよく知られているものだが、この布を誰がどこで織ったかは福音書にも外典にも『レゲンダ・アウレア』にも語られていない。リルケは、それを MARIA が「女の家」(Frauenhaus)で織ったとしているが、この「女の家」が何であるかは、多くの読者にとって一種の謎であろう。

ところがリバデネイラを読むならば、それが神殿に奉獻されたのちの MARIA が宮に仕える他の娘たちとともに住んでいた棟(エメリクはさらにそれが神殿の北に面した一角にあったとさえ語っている<sup>21</sup>)を意味し、しかもそこで布を織って暮らしていたため布を織る仕事にたけていた MARIA がやがてイエスのために縫い目のない衣を織ったという記述に接することになり、こうした関連からリルケのこの詩句を理解しうるのである。けれども、この

モチーフにせよ、リルケがそれをリバデネイラから借りたという証拠はないし、いったいにマリアの生涯についてのリバデネイラの記事がリルケの詩集と、いかにも後者によって前者が利用されたかのように全体にわたって歴然と対応しているわけでもない。すくなくとも聖者伝やそれに類するものに関するリルケの知識をかなり低く見つもらないかぎりには、シュナツクの指摘は慎重さを欠いた過大評価だといわざるをえない。

一方、マリアンネ・ジューヴェルスは特に『レゲンダ・アウレア』が「マリアの奉献」や「マリアの死」その他の詩想を触発したと考えているが、<sup>(22)</sup>『レゲンダ・アウレア』はリルケのこの詩集を理解するためにきわめて有益ではあっても、直接にそれがこの詩集に利用された可能性ないしはその利用の度合いは、リバデネイラの聖者伝の場合よりも小さかったように思われる（両者とも同じ原型・定型にもとづいて多くのことを書いているので、肝心な点ではたがいに共通しているのだが）。それに、リルケの「マリアの死」ではイエスの昇天後のマリアの在世期間は、エピファニウスの説の系統をひいて二四年となつてゐるのに比し、<sup>(23)</sup>『レゲンダ・アウレア』がエピファニウスの説にやや否定的で、一二年説に傾いている点や、死の告知の天使が、リルケにおいては受胎告知の天使と同じガブリエル（死の告知の天使は普通はミカエル）であるのに、<sup>(24)</sup>『レゲンダ・アウレア』はそれをたんにひとりの天使とし、彼女の昇天のさいに現われる天使をミカエルとしている点などは、リルケがこのモチーフをあつかうにあたって他の伝説（しかもこのさいそれはリバデネイラの聖者伝ではない。彼も死の告知の天使を「ひとりの天使」とするにとどめて固有名詞では表わしていないし、エメリクもまた同様である）に依拠した可能性を暗示している。

こうしてリルケがおよそいかなる複数の聖者伝の読者だったかはつまびらかではない。ただ、『マリアの生涯』

の細目を決めるにあたってリルケが、マリア伝に関して自分のもっているもろもろの知識を想起したり、参照しうる手元の資料を細心に参看したと考えるのは間違いないはずである。この詩集を仕上げた一年後に、A・キッペンベルクからゼヴェリオン・リュトガーの『聖者の生涯と受苦』を贈られて、それになりたいする感謝の手紙（一九一三年一月二一日付）をリルケが書いていることも、聖者伝やそのたぐいのものになりたいするリルケの持続的興味との関連からつけ加えておこう。

しかし必要なのは、リルケが『マリアの生涯』の制作に利用した伝説的資本の仔細を明らかにすることではなく、全体としてそこではマリア伝の中世リルネッサンス的な原形態とその変形が詩想の中核をなしているという、この詩集の定型性を確認することであろう。また伝説的資料は、福音書、新約外典、マリアに関する美術上の作品などとともこの詩集に寄与したひとつの要素であることと、これらが実はみな不可分に結びついたものである、だから詩人はこれらをすべてほとんどひとつの流のように受けとめたにちがいないということにも、充分な注意をはらってしかるべきである。

## 8

それにしても『マリアの生涯』は、その作者自身から奇妙に冷淡な扱いを受けている作品である。リルケはこの詩集を「外的な制約によって」（一九二四年十月二一日付のヘルマン・ポングス宛ての手紙）「副次的」（一九二二年一月六日付のジッツォー夫人宛ての手紙）に手がけられた仕事だと呼び、彼の本格的作品のなかには数え

ていない。こうした自己評価の心理的背景には、この詩集が純粋な自発的創作衝動にもとづく仕事ではなかったという事情や、またそれが充分な創意によって形成されたものではないという自覚などととも、自分がキリスト教とは離反した思想的立場にありながら、カトリック的表象の肯定を形式的前提とするような詩集を制作したことにたいする疚しさめいたものがあつたように思われる。それにこの詩集は『第一の悲歌』の仕事と重なり、そして『第二の悲歌』に本腰で取り組む直前の短時日のあいだに書かれていたのであつて、だからこれは、本来なら『悲歌』のそのような思想と詩法による仕事に集中されるべき創造的精力の流れを、彼自身の完全な表現ではないものなかへ一時的にそらすことによつて形づくられた作品だったのかもしれない。

ヘルマン・ボンクスに宛てた手紙のなかではリルケは、この詩集を「意識的に追感しながら」(bewußt zurück-zuhilfenahm)書いたと言っている。マリアンネ・ジーヴェルスはこの言葉を、イタリアでマリアを描いた一連の聖画(ギルランダーヨ、ジョット、ボッティチェリなどの)を観たときの感動を意識的に呼び起こして、という意味に解しているが、この言葉は同時にまた、以前にマリアと関係のある詩を書いたときの気持ちをあえて喚起して、という意味にも解せるものである。しかしリルケが一九〇〇年にフォーゲラーの絵によせて書いたマリアに關係のある詩、「牧人たちへの告知」や「避難の途上でのいこい」、または翌年これらに(「牧人たちへの告知は改稿」)「マリアへの告知」をつけ加えた『あるマリアの生涯より』は、「避難の途上でのいこい」をいささか別とすれば、一九一二年の『マリアの生涯』やこれに収められた同名の諸詩篇とは内的なつながりがきわめて乏しい。十年以上も前に書かれたそれらの作品は、伝統的なマリア伝の定型性とはずいぶんかけはなれた、しかし創意を深く反映したというよりはむしろ恣意的な場面と時間をもつ軽妙な牧歌的な作品で、描かれた出来事には

確実な中核がなく、その印象も散漫である。たとえば「牧人たち」（改稿。一九〇一年）の最初の一節を読んでみよう。

ブロンドの乙女に成就の

充溢を語ったあの天使が

ふたたび月から地上に降りてきて、

すると絹のロトンドに包まれて

おびただしい天使らが彼のとつき従った。

この「牧人たち」などは宗教的伝承のなかのマリアや告知の天使を対象としているとは思えないなんとも妙なパロディ的作品である。リルケが過去の自分の詩作をあえて追感しつつ『マリアの生涯』の制作に取り組んだとすれば、そのさい彼の念頭にあったのはむしろ『新詩集』のなかの「復活者」（一九〇七）、「マグニフィカート」（一九〇八）、「エヴァ」（一九〇八）その他のような系列の、聖書的な題材による諸作品だったというべきであり、『マリアの生涯』は手法的にも心的態度においても、これらの作品の近い延長線上で、ただし情緒的にはより昂揚した調子をもって書かれているのである。<sup>(26)</sup>

おもえば、リルケはマリアについてかなり多くのことを語った詩人である。一八九八年には一六篇の詩からなる連作『マリアへの少女たちの祈り』があるほか、『フイレンツェ日記』にはサンタ・マリア・ノヴェラ教会で



石に描かれたギルランダーヨの『マリアの生涯』から受けた深い感動がしるされてはじめてとして、マリアあるいはマリア像にたいする考えがくり返し書きとめられている。そして詩集『マリアの生涯』にいたる道はこの前者からよりも、この後者から通じているのだが、さまざまな時期に書かれた、マリアに関するリルケのさまざまな詩はわれわれに、『マリアの生涯』が作者自身のいうようにたんなる外的機縁によってではなく、それなりの内的必然から生み出されたものであること、リルケが一度はこのような形でマリアに関する自分の独特な関心を結実させねばならなかった人であることを語っているようにみえるのである。またいずれにしてもこの作品は、マリアについてのリルケの仕事の、あるひとときわ深い層でとげられた成熟だといってさしつかえないだろう。

リルケの『マリアの生涯』を大きく特徴づけているもの、そのひとつはもうすでに述べたように、リルケがここで形式的にルネッサンスやその前後の時代のマリア伝作面と軌を一にするような定型性をふまえていることであり、もうひとつは、詩想のうえで彼が、高度に運命的だった生涯を生きた悲哀の女性としてマリアを見つめ愛する観方をこの作品の中心に置いていることである。まず第一の特徴についてもうすこしまかく観察してみよう。この作品では各詩篇がマリアの生涯の順序にしたがって年代記的に配置され、そのそれぞれが提示する場面の基本的輪郭は、中世以来キリスト教世界の無数の人びとの想いと眼差しがそれをたどってきたような線より

なっている。各詩篇の文体や規模は統一性を欠いており、相寄ってむしろ不均整な構成の独特な妙を織りなしているが、この不均整をそれにもかかわらず緊密に統一しているものこそ、いまいったような定型性だろう。そして各詩篇がそれぞれに担う情景・場面と、これらと同じくきわめて古い年歴をもつ各標題との対応性からは、実におのずから、あのまったく特別な、しかしほとんどあまりにも親しみ深いひとつの世界、その一齣ひとまじり一齣ひとまじりに意味とまた数知れぬ人びとの夢想と思念と希求とが凝縮し集中されているひとつの世界の色調と息吹きが伝わってくるのである。つまりここに認められるのは、『形象詩集』中のマリアに関係のある作品「告知」(一八九九)や「聖なる三王」(一八九九)にみられるような、出来事の内容を自由に変形させてしまうやり方とは原則的に逆の方法である。だから『形象詩集』のなかの譚詩「聖なる三王」のように気ままな諧謔がふんだんにもちこまれている作品が入りこむ余地は、『マリアの生涯』にはないだろう。また少なくともこのような作品と比較するとき、総じて『マリアの生涯』においては、恣意と多様性を抑制しようとする志向が働き、それぞれの詩篇がその題材の核となる一個の根本的事件への注意の集中を目指している。しかしそれだけに、充分この志向にそっていない幾つかの部分は一種の違和感を引き起こしてしまう。たとえば過度な情緒的誇張におちいつている「マリアの奉獻」や「牧人たちへの告知」にそうした例が認められるし、「マリアへの告知」でも、一角獣がそこに登場する仕方は、類似の先例ひびこそあれ、この場合やはり奇異で拙劣だといってさしつかえない。

第二の特徴は、教会神学のマリア論にもとづくようなマリア崇敬の感情がこの詩集には不在で、これは、罪のあがないへの助力者、思寵の仲介者としての役割をマリアに託すような立場がここでとられていないことと表裏一体である。ジュームソンの『マドンナの伝説』は、マリアを芸術的に表現する場合の二つの大きな方法として、

崇敬的 (devotional) なそれと歴史的 (historical) なそれとを區別し、<sup>(28)</sup> いわゆる「栄光の処女」  
「無原罪の懐胎」  
「マリアの戴冠」  
「王座のマリア」  
「慈悲の聖母」など、特別な類型のうちにマリアを表わしているものを前者に数え、マリアの生涯に属する場面を劇的な形姿のうちに表わしているものを後者に数えている。リルケの『マリアの生涯』がこの後者の系列に入るとはまったくいうまでもない。むしろこの歴史的な表現のなかにも崇敬的要素が入りうるし、逆に『アカティストゥス・ヒームノス』は崇敬の表現のなかに歴史的要素を混えたものである。しかしリルケの『マリアの生涯』においては崇敬的要素が最小限に抑えられている、ということができよう。すくなくともここでは、聖なる「元后」としてのマリアの前で敬虔な信徒の心のうちから発せられる讚美もしくは祈りに類するものは聞きとることができない。あるいは、この詩集はその歴史的な粹としてはマリア伝・定型的表象をそのままに借りながらも、内実においては、マリアなる人の形姿をより人間的なひとつの女性像・母性像に還元していると言つてよい。伝統的な処理にしたがったのは、場面選択などの外的形式の面におけることであつて、その詩想は教理的色調のもとに展開されてはいないのである。なるほどここでも、時にはマリアの内的偉大にたいする詠嘆が洩らされるだろう。それはしかし、厳密な意味での宗教的崇敬とは性格を異にするものである。

この詩集の最初の四篇にあつてマリアは、選びと恵みのなかに深くある女性として描かれているが、そのあと  
の作品展開のなかできわだつてくるのは、あまりにも大きな運命をなうことになつた一女性の、その固有な悲しみである。宗教と伝説によつて神性と例外的に結びつけられてしまつたひとつの生涯——そのなかで彼女は時に歎ばしくまた誇りやかではあつても、むしろより一層、とまどつてゐる人であり、孤独に堪えている人、自己

の運命を悲しみの眼差しで見つめる人なのだ。このようなマリアの姿にこそ、おそらくこの詩集の情念的な中心はある。しかもそうしたマリアのたたずまいは、無比の選びと恵みを彼女がつましい歎びをもって受けとったときの様子がそれに先立って描かれていることにより、なおさら深い悲しみに刻印されているようにみえるし、時として彼女はまた、その思い誤まれていた幸福の予感の廃墟にたたずむ女でさえある。「受難の前に」という詩では彼女は「わたしにはもう乳と涙の川しか残っていない」と言う――

あなたはみずからの心に痛みをおぼえぬだろうか、

あなたの愛する谷をこのように荒れはてさせて？ わたしの弱さを見るがいい。

わたしにはもう乳と涙の川しか残っていない。

そしてあなたはいつもあまたの人びとのうちにいる。

乳と涙——それがここでは彼女の意識における、彼女とイエスの関係の象徴なのだ。幼児であったイエスをはぐくんだことと、やがて彼女を遠く超えてしまったわが子の受難と死とを、ひとりの単純な女である彼女の母性のもっとも深い部分で悲しむこと、これがこの詩集では、イエスとの関係の——彼女にとっての——もっとも大きな現実性なのである。そしてこのマリアの悲しみを慰めて、イエスと彼女との関係を「新しい季節」のなかへ移すのが「復活のイエスとマリアの安らぎ」であり、また彼女の死について書かれた三篇の作品は、彼女の死を永遠のなかへと完成させる役割をはたしている。しかし天上で、自分のために残されていた席のほうを眺めるときにも、彼女はやはりひとりの「貧しいはしため」に似ているだろう。

彼女は不安げにそちらへ眼をやった。

身を深くかがめ、あたかも——

わたしがあのかたのもっとも長い苦痛なのだと

そう感じているかのように——そしてふと前へくずおれた。

天使らはしかし彼女を抱きよせ

彼女を支えながら幸い深く歌って

そして彼女が最後に歩む道を高めた。

マリアの生涯として伝えられているものは、貧しい事実と深い想像との微妙な混合であって、そこには夢が、憧憬が、要請が、すみずみにまで染みこんでいる。マリア伝は再現された生涯ではなく、忘却のちにいわば乏しい痕跡を頼りに想い浮かべられた生涯である。そして彼女ほどにその生涯が伝説のなかで高められた女性はいない。教会が彼女についてのもっとも重んずべき記録として、新約聖書を冷静に評価するときかえってそこから察せられるように、彼女はたぶんひとりの単純な女であり母であった。聖母または聖処女マリアの表象のもとに人びとの讃嘆と希求を喚起するのは、その表象のなかに吸収されかつ極限的に昇華され醇化された女性的なもので、しかも純粹に処女的であると同時に純粹に母性的なものであって、実在のユダヤ人女性ミルヤームの正しく保持された姿ではない。けれども、あまりにもしばしば語られ、描かれ、眺められ、呼びかけられることによって、なかなば以上も虚構によって形成されたものでありながら、 $\heartsuit$ マリア $\heartsuit$ なる存在とその像は、ある特別な実在

性において、実在した無数の人びとに比類なくたちまざっている。いや、こうして遠いミルヤームの影を想い浮かべながら同時に、伝説と芸術のなかの「マリア」に眼を向けるときにこそ、われわれはミルヤーム「マリア」の眞の運命の前に立ち、そして人間の想像力のもっとも奥深いひとつの領域の前に立っているのである。マリア像は、マリア伝はこの想像力の色彩と線なのだとも言えよう。

マリアの生涯、とくにその処女降誕と被昇天について、それを事実として語る資格を有しているのは、実のところ正統的なキリスト者だけである。自覚的な非キリスト者だったリルケは、これもひとつの神話の再創作である。とあえてみずから説得することによって、彼の『マリアの生涯』を書きえたのもあろう。しかし、もろもろの神話がおはや宗教的決断の反映でもなければ、宗教的決断を人間に迫るものでもないのにひきかえ、マリア伝はイエス伝と同様、いまなおその実在性を主張し、ひとつの決断を迫ることをやめていない。リルケの『マリアの生涯』は、けっして明白な信仰の表現や決断の要請ではないにせよ、カトリック的ないしは東方教會的信仰表象をそのまま様式的基盤として利用しているかぎりにおいて、たんなる神話の再創作と同一視すべき性質のものではない。ここにはひとつの思想的矛盾を認めるべきであろうか？　そう、われわれはそこに矛盾を認めることができる。それとも、われわれはこう問うべきなのか、マリア伝それ自体がすでに久しく獲得し、またいまもなお保っている特有の強固な実在性のためにこの詩作は、たんなる一神話・一伝説の気楽な再現と同じようにはみえないのだろうか、と？　いや、伝説のなかの、芸術のなかのマリアにたいする特別な愛のために、リルケはあえてひとつの思想的矛盾をおかしたと考えるのが、もっとも当を得ているようだ——けれどまさにこの矛盾への苦い反省意識こそ、言語的成果にたいする不満以上に、リルケをしてこの詩集をみずから冷淡に評価させ、

多くをそれについて語るのを妨げているものなのだ。

結果として残されたのはいずれにしても、文学史上きわめて特異な位置を占める一作品であり、また恣意と創意を抑制し、定型性のなかで慎重に自由を追究するという道を選ぶことにより、リルケはたぶん、別の手段にうったえた場合よりもよき作品を完成しえたのである。伝説と美術のなかから詩の領域に転置されたともおもわれるこの作品がさらに音楽の領域に移されたことは、広く人びとの知るところである。この詩集によるソプラノとピアノのための作品『マリアの生涯』を作曲して一九二三年にその初版を刊行したパウエル・ヒンデミットは、長年にわたって「たえざる検討と改正」の手を加えた決定稿を一九四八年に改めて公けにしている。この決定稿に付してヒンデミットが序文に代えて書いた「マリアの生涯」と題する長い自作解説の文章は、<sup>(20)</sup>彼がリルケの『マリアの生涯』のもっとも良き、もっとも真面目な読者だったことを示しているものかもしれない。

#### 注

- (1) オスカー・クルマンは『ヤコブ原福音書』の成立が紀元一五〇年以前ではありえないとしている。(Oscar Cullmann in: *Edgar Hennecks Neutestamentliche Apokryphen in deutscher Übersetzung, herausgegeben von Wilhelm Schneemelcher, I. Bd., Tübingen 1959, S. 303*)。また F. L. ファイラスも「これがいちばん古くて、紀元一五〇年頃に書かれ」と言っている (F. L. Filias, *The Man nearest to Christ*, 邦訳『聖ヨゼフ』中央出版社、一九六一年、二二六ページ)。
- (2) 『ヤコブ原福音書』第二〇章第一節参照。
- (3) クルマンによれば八〜九世紀(前掲書三〇三ページ)、ファイラスによれば五世紀頃(前掲書二七ページ)。
- (4) K・アルガーシッセン他編『マリア学事典』(*Lexikon der Marienkunde, herausgegeben von Konrad Algermissen u.*

a, 1. Bd., Regensburg 1967) 第二八欄参照。

- (5) H・キックス他編『キリスト教図像学事典』(Hannelore Sachs-Ernst Badstübner-Illega Neumann, *Christliche Ikonographie in Stichworten*, München 1975, S. 117) はこのモチーフを伝説的な形式で潤色したものとして Ludolf von Sachsen, *Vita Jesu Christi*; Petrus Cellensis, *Vitae beatae Virginis; Pseudo-Bonaventura, Meditationes Vitae Christi* を例にあげ、造形美術におけるこのモチーフの表現は十四世紀以来みとめられる」と記している。

- (6) A・エバン・ホリスタ『マリア論入門』(中央出版社 一九七一年)三五二―三五三ページ。

- (7) 「ジュームスン『マドンナの伝説』(*Legends of the Madonna as represented in the fine arts by Mrs. Jameson*, London 1867) 序章五六ページ参照。

- (8) 独訳『レゲンダ・アウレア』(*Die Legenda aurea des Jacobus de Voragine aus dem Lateinischen übersetzt von Richard Benz*, Heidelberg 1975) 五八三ページ。

- (9) A・マッサー『ドイツ中世における聖書的・伝説的叙事文学』(Achim Masser, *Bibel- und Legendepoetik des deutschen Mittelalters*, Berlin 1976) 九八―九九ページ。

- (10) ファイラスの前掲書、一五五―一五九ページ参照。

- (11) マッサーの前掲書、九二ページ、一〇二ページ。

- (12) *Das Marienleben nach den Geschichten der Anna Katharina Emmerick aufgezichnet von Clemens Brentano, neu bearbeitet von Dr. Gerrud Theiner-Haffner*, Innsbruck 1952)。

- (13) 一九二二年一月六日付、二月二日付、十月二五日付のA・キッペンベルク宛ての手紙、一九二三年一月六日付のジッソー夫人宛ての手紙、一九二四年十月二日付のヘルマン・ホングス宛ての手紙参照。

- (14) いわゆる聖山アトスで伝承されてきたキリスト教図像学的手法を集めた、画家のための書で、初期ビザンツ時代から各国語による多数の版があったが、西欧によく知られるようになったのは、画僧ディオニシオス・フルノグラーボスが二七〇七年から一七三三年にかけて近代ギリシア語でまとめた版である。リルケが参照したのは次の独訳である。——Dionysios von Phurna, *Das Handbuch der Malerei vom Berge Athos* (= *Das Malerbuch vom Berge Athos aus dem handschriftlichen, neugriechischen Urtext übersetzt, mit Anmerkungen von Diakon d. A., und eigenen von*



Godhard Schäfer, Trier: Lintz 1855.

- (15) H. シンテン「リルケと中世」(Ernst Zinn, Rilke und die Antike)——ブルーノー・スネル編『古代と西洋』(Antike und Abendland, Beiträge zum Verständnis der Griechen und Römer und ihres Nachlebens, herausgegeben von Bruno Snell, Bd. III, Hamburg 1948) 一一五ページ以下参照。「アカタイストス・ヒュムヌス」は序詩二四の詩節からなり、作者は未詳だが、六世紀にシリアの詩人ロマノスによって書かれたとする推定が有力。このマリア讃歌の独訳はたゞそびフランスで刊行された『ロマネスクのマツルナ』のドイツ語版 *Romantische Madonnen* (Deutsche Ausgabe des französischen Bildbandes vierges romanes) Echter Verlag のなかに書かれてゐる(同書八ページ—一九ページ)。この『アカタイストス・ヒュムヌス』は全体にわたって自由に意訳されてゐるようだが、われわれの問題視してゐる第六節の始めは Der Aufuhr der widerstretenden Gedanken verwirre den besonnenen Joseph in seinem Innern... となつてゐる。なお、現在マインの最大のキリスト教図像字事典 (*Lexikon der christlichen Ikonographie, herausgegeben von Engelbert Kirschbaum*, 1. Bd., Rom-Freiburg-Basel Wien 1968, Sp. 87) に zalen endothen eohon の意味が Einen Raum im Innern habend... となつてゐる語を採られたこと、ついでマイン語の『トリス』の『トリス』の「詠禮」を踏襲したものであらうか。

- (16) マリヤンネ・ジーヴァルスの書 (Marianne Sievers, *Die biblischen Motive in der Dichtung Rilkes*, Berlin 1938) の「オキペーシ」の巻の序文——Unter dem Titel „Muttergottesfeste“ werden dort folgende einzelne Motive aufgeführt: 1. Die Empfängnis der Mutter Gottes.—2. Die Geburt der Gottesgebäerin.—3. Die Gottesgeläerin wird von den Priestern gesegnet.—4. Der Eingang der Heiligsten.—5. Joseph nimmt die Heiligste von dem Allerheiligsten.—6. Der Tod der Gottesgebäerin.—7. Die Aufnahme der Gottesgebäerin. Die übrigen unter diesem Thema fehlenden Stücke begeben, wie erklärlich, unter den „Festen des Herrn“, wobei sich die Anweisungen beziehen auf: „Die Verkündigung der Mutter Gottes.—2. Joseph, da er die Schwangerschaft der Mutter Gottes sieht, macht ihr Vorwürfe.—3. Die Begrüßung der Mutter Gottes und der Elisabeth.—4. Die Anfrage der Magier.—5. Die Geburt Christi.—6. Die Darstellung Christi.—7. Joseph flieht mit der Mutter Gottes nach Ägypten.“ Unter der weiteren ausführlichen Darstellung des Lebens Christi kommen ebenfalls das Wunder zu Kana und die Passion vor, die in

viele Einzelbilder zerfällt, so daß nur die Gedichte „Pieta“ und die „Stilung Maria mit dem Aufstehenden“, bei Rilke hinzukommen.

- (17) リルケはキエフの教父文書のなかの、聖書的な対象を描く場合の手引きや規則を集めたものも『マリアの生涯』の制作にあたって用いたようだが(一九二二年一月六日付のジッツォー夫人宛ての手紙参照)、これとリルケの詩集のあいだにいかなる具体的な関連があつたか、この問題に言及している文献もない。

- (18) エ・シ・ロナン『リルケ年代誌』(Ingeborg Schneck, *Rilke Chronik*, 1. Bd., Insel Verlag 1975) 三九三頁。

- (19) Pedro Ribadeneira, *Leben aller Heiligen Gottes. (Aus dem Spanischen) von J. Caninio ins Lateinische übersetzt und vermehrt, ansetzt aber von J. Hornig in deutscher Sprache herausgegeben...* Augsburg 1710~12.

- (20) 前掲書『第二卷』一八九~二〇〇頁。——Nach Verlauff dieser Tagen kahme der H. Apostel Thomas angezogen/welcher das Glück und Gnad nicht gehabt/die Mutter JESU auff ihrem Todtbehtlein anzutreffen. Diesen ängstigte über alle massen/dab/ auß so vilen andern/ seine Augen allein die unglücksseeligste seyn solten/ das größte Kleinod der Welt nicht mehr in diesem Leben anzuschauen; und fanget/ mit Hertzbrechendem Jammern an/die gegenwärtige Apostelen umb alles auff der Welt zu bitten/sie mögten doch das hochheilige Grab-Gewolb/ ihm zu Lieb/ wiederum öffnen: auff daß auch er/.../ wenigstens das nummehr ruhende Heilighumb/ vor seinem Todt noch einmah anschauen und verehren könne. Die Apostelen waren nicht dargegen; dann die Göttliche Fühsehung diese Begebenheit also gefüget gehabt/auff daß die Glori der Himmels-Königin kund würde. Machten ihm derohalben das Grab wiederum auff/ und sihe Wunder! da ware kein Leib mehr zu finden: sondern die blosse Leinwand lage in dem Sarg/in deren er eingehüllet gewesen: worauß sie abgenommen/daß die Göttliche Allmacht ihn wiederum zum Leben erwecket habe. Verschlussen solchemnach das Grab/ gleichwie zuvor/welches mit himmlischem Geruch dick angefüllet ware: und nahmen ihren Weeg mit größten Freuden wiederum in die Stadt: gleichsamb nummehr versichert/ daß ihre heiligste Frau jetzt mit Leib und Seel bey ihrem Göttlichen Sohn in dem Himmel lebe und herrsche.

- (21) 前掲書(注・12参照)九〇頁。

- (22) 前掲書(注・16参照)一〇六~一〇七頁。

(23) 前掲書(注・8参照)、五八三ページ参照。また偽名、メリトの『マリアの遷化』ではイエスの死後、二年目にマリアはひとりの天使によって死を告知される(マッサーの前掲書へ注9・参照√九八ページによる。)リバデネイラはこの点に關して具体的な数値をあげていない。またエメリク(前掲書、五三九ページ)は「神の母はキリストの昇天後もなお一四年と二カ月生きた」と語っている。

(24) 前掲書(注・8参照)、五八三ページ、五八八ページ。

(25) 前掲書(注・16参照)、一〇七ページ。

(26) リルケは『新詩集』のなかの「マグニフィカート」はあらたに書かれるべき『マリアの生涯』のためには「ほとんど問題にならないだろう」とA・キップペンベルク宛てに書いているが(一九二二年一月六日付)、この「マグニフィカート」と『マリアの生涯』のなかの「マリアの訪問」との関係(両者の詩想的な核はほぼ同一である)は『新詩集』の中のこれら一連の作品と『マリアの生涯』に収められた諸篇の関係を象徴的に示しているといえよう。

(27) 四く五世紀にアレキサンドリアで成立したと推定される『フィジオログス』などをとおして広く人びとに知られることになった空想上の動物、一角獣は、最初は凶暴な力、のちには処女の純潔の象徴となったが、十二世紀の初め頃から、受胎告知や無原罪の懐胎を表わす絵画にも登場するにいたった。矢代幸雄『受胎告知』(新潮社、一九七三年)はその一節を「一角獣の加わる受胎告知比喩の図」の解説に当てている(一三九〜一四一ページ)。

(28) 前掲書(注・7参照)、序章五一ページ。

(29) パウル・ヒンデミット『マリアの生涯』(Paul Hindemith, *Das Marienleben, Gedichte nach Rainer Maria Rilke für Sopran und Klavier*, Mainz 1948) I〜Xページ。

〔付記〕リバデネイラの聖者伝の独訳は九州大学の上村弘雄氏のご好意により参看することができた。記して深く感謝申しあげたい。